

「個人」の自立や西洋的な合理的思想は科学技術の発展に支えられ現代人の常識となり非合理的迷信のようなものはいずれ科学の進歩により克服されると考えられてきました。合理性を推し進めた科学は人間の英知・理知が昔の神に代わるごとく信じられてきている場面もありますが、その結果が必ずしも人を幸せに導いているだろうかという反省をしてもいいのではないかと。なぜなら合理性の追及に対する疑問はソクラテス(BC469-BC399)、老子(BC600 頃)の時代のみならず人間が道具を使い始めた時からあったのかもしれないからです。

釈迦は人間の英知・理知によらない「知」の様式として「般若」とか「智慧」の様式を提唱しました。これは人が文書化して読み理解できるような様式ではなく、体験・修行により得られる「知」の様式であるとしています。---頭で覚えたものでなく体が覚えたものか? 「般若心経」がとっつきにくいには、現代の合理的・科学的「知」の様式から般若・智慧への「知」の様式の切り替え・転換を迫るからであるといえます。よって「般若心経」を読んだから理解できたというのではなく、その後の実践的体験によって悟るものであるといわれています。

お釈迦様(釈尊)は 2500 年前、紀元前 5 世紀頃インドに生まれました。没後 600 年ほどしてから 600 巻もある『大般若経』が完成したといわれています。玄奘三蔵(げんじょうさんぞう、602 年 - 664 年唐代)がインドより経典(大般若経)600 巻を持ち帰り、当時の国の後押しもあり 20 人のチームが 20 年かけてそれを漢訳したといわれます。その時エッセンスとしてまとめたものが「般若心経」です。日本には 8 世紀奈良時代に漢訳が遣唐使により伝えられました。世界最古のサンスクリット語の「貝葉梵字般若心経」の写本が奈良法隆寺にあります。しかし、現在のインドには仏教徒は 0.5%程度しかいない。残りはヒンズー教、イスラム教が主流です。中国も共産革命後ほとんど仏教はすたれ寺は観光化しましたが、徐々に復旧しつつあるようです。朝鮮にはしっかり残っています。

般若心経はサンスクリット語を漢字の当て字で表現しているところがあるので直接読んでも理解しにくいところが多いので、読み方と解釈をつけ、ついでに つたない感想考察を科学的見地を考慮して付け加えてみました。さらにこの分野に全くのど素人でしたので、基本的単語の意味も思い出せるように付け加えてあります。僅か 262 字足らずの本文に大乘仏教の心髄が説かれているとされ、複数の宗派において読誦経典の 1 つとして広く用いられ、John Lennon の imagine や Steve Jobs をして「見えなかったものが見えるようになり、聞こえなかった声が聞けるようになった」と言わしめたとも言われていますので参考になるかと思えます。

般若心經(はんにやしんぎょう)

漢訳全文 玄奘三蔵(唐)訳

摩訶般若波羅蜜多心經(まか はんにゃ はらみつた しんきょう)

觀自在菩薩(かんじざいぼさつ)

行深摩訶般若波羅蜜多時(ぎょうじんはんにゃはらみつたじ)

照見五蘊皆空(しょうけんごうんかいこう) 度一切苦厄(どいっさいくやく)

舍利子(しゃりし)

色不異空(しきふいこう) 空不異色(くうふいしき)

色即是空(しきそくぜくう) 空即是色(くうそくぜしき)

受想行識(じゅそうぎょうしき) 亦復如是(やくぶによぜ)

舍利子(しゃりし)

是諸法空相(ぜしよほうくうそう) 不生不滅(ふしょうふめつ)

不垢不淨(ふくふじょう) 不增不減(ふぞうふげん)

是故空中無色(ぜこくうちゅうむしき) 無受想行識(むじゅそうぎょうしき)

無眼耳鼻舌身意(むげんにびぜつしんい) 無色声香味触法(むしきしょうこうみそくほう)

無眼界乃至無意識界(むげんかいななしむいしきかい)

無無明(むむみょう) 亦無無明尽(やくむむみょうじん)

乃至無老死(ななしむろうし) 亦無老死(やくむろうしじん)

無苦集滅道(むくしゅうめつどう)

無智亦無得(むちやくむとく)

以無所得故(いむしょとくこ) 菩提薩埵(ぼだいさつた)

依般若波羅蜜多故(えはんにゃはらみつたこ) 心無罣礙(しんむけいげ)

無罣礙故(むけいげこ) 無有恐怖(むうくふ)

遠離一切顛(おんりいっさいてん) 倒夢想(どうむそう)

究竟涅槃(くきょうねはん)

三世諸仏(さんぜしよぶつ) 依般若波羅蜜多故(えはんにゃはらみつたこ)

得阿耨多羅三藐三菩提(とくあのかたらさんみやくさんぼだい)

故知般若波羅蜜多(こちはんにゃはらみつた) 是大神呪(ぜだいじんしゆ)

是大明呪(ぜだいみょうしゆ) 是無上呪(ぜむじょうしゆ) 是無等等呪(ぜむとうどうしゆ)

能除一切苦(のうじょいっさいく) 真實不虛(しんじつふこ)

故説般若波羅蜜多呪(こせつはんにゃはらみつたしゆ) 即説呪曰(そくせつしゆわつ)

揭諦揭諦(ぎやていぎやてい) 波羅揭諦(はらぎやてい) 波羅僧揭諦(はらそうぎやてい)

菩提薩婆訶(ぼじそわか)

般若心經(はんにやしんぎょう)

-----以上-----

解説

わかったようでわからない 悟るか悟らないかはあなた次第?。

以下赤太文字部分(262文字)が本文です。

般若(智慧)心(大切な)経---考え判断する智慧(行)である大切なお経という意味。

ちなみに英語版の題名は「The heart sutra」

予備知識

経とは---仏教徒が大切にしている聖典のこと。キリスト教の聖書、イスラム教のコーラン。

お坊さんは**智慧、知恵、知識**を使い分けているようです。

智慧---ものごとの真実の姿を見極める力。全ての存在の根源となる理性。仏様からのもの。
般若ともいう。

知恵(wisdom か)---物事をありのままに把握し、真理を見極める認識力。自分の心から生じるもの。

参考までにイギリスの文明評論家ハーバート・リード(Sir Herbert Edward Read 1893-1968)は **wisdom** とは

「理性とロマンティシズム(本能、直観、想像力、幻想・幻覚を含む)との間に揺れ動いて、その間に釣合いのとれた位置を指し示すコンパスのようなものである」と定義しています。

知識(knowledge か)---物事について知っている事柄とか、認識・経験によって得られた情報。

キリスト教・イスラム教は一神教に対し**仏教は多神教**である。

仏教はなぜ多神教か---人間を含めあらゆるものに仏性が宿ると考えるためである。

人間はじめ動物も樹木も悟りの境地に達すれば仏になると考える。神仏融合容易。

仏教では死ぬことを「**往生する**」というが往きて生まれる、つまりあの世で生まれ変わる、魂は永遠であるという思想です。

キリスト教---汝の隣人(敵をも)を愛せよ。

仏教---愛するな--自分を捨てた無償の愛を求めよ(渴愛は結局自愛であり他愛ではない)。愛すれば執す。執すれば着す(執着心がわいてくる)。キリストと同じことを裏返して言うだけ。物事にとらわれない、執着から離れ自在になる心を持つと言っています。

「**渴愛**」とは人に要求する愛---キリスト教では「**エロスの愛**」

ほかに「**慈悲**」という愛があります。「**慈**(誰彼の区別なく友情をささげること)**悲**(悲しいということではない。うめき。自分の苦悩にうめいたものだけが他人の苦悩にうめくことができる)」という愛がある(背かれ裏切られても憐れみを増すこと)。報酬を求めない(神仏の愛)---キリスト教の「**博愛(アガペーの愛)**」と同じ。

奈良薬師寺管長の「**高田好胤(1924-1998)**いわく「**慈悲**」とは、

「永遠なるものを求めて永遠に努力する者が、努力すればするほどその道が遠くなるとわかっていながらその道をゆく人を菩薩という」とも定義しています。

「忘己利他(もうこりた) 己を忘れ他を利する---日本の現在の仏教**大乘仏教**へつながる比叡山流の考え

縁起とは---原因があつて結果があること。12 の縁起があるようです。最後の付属 page 参照

人の人生を表すものとして仏教には四つの真理あり:**四諦(苦集滅道)**—四つの真理がある。

四諦とは---最後の解説 page 参照 道諦の中に**八正道**(悪いことはするな)があります。

八正道とは---最後の解説 page 参照---小乗仏教的項目

理屈では分かっているが人間にはできないことが多々ある。それをすることが仏教の極意である。

仏とは---死人、仏像とかではなく「真実の人間性」のこと。**釈尊**が悟られた内容を「**象徴的存在**」として表現したもの。あくまで「象徴」であつて「偶像」ではない。

従つて「**仏**」を拜むというのは「**偶像崇拜**」ではない。次の言葉は意味が深い。

一休禪師(1393-1481)のことば

「よもすがら 仏の道を たづぬれば わが心にぞ たづねいりける」

仏法とは---自分自身をみつめ知ること。

座禅とは 雑念を取り去りひたすら座る。釈迦 **道元禪師**(1200-1253)が始まり---禅宗

煩悩(あらゆる人間の欲そのもの)を捨て去ることができる!。何物にも囚われない境地。

南無妙法蓮華經(なむみょうほうれんげきょう)とは—日蓮—日蓮宗、天台宗

「**南無**」は私は帰依しますの意味。「**妙法蓮華經**」---「**法華經**」の教えという意味。

よつて「私は法華經の教えに帰依します」と宣言していることになります。

南無(帰依しますという意味)**観世音**(この世の中ができていゝ実相、真相を見ること)**菩薩**(なむ かんぜおん ぼさつ)とは---世の実相、真相を観ている菩薩様に帰依しますという意味。

南無阿彌陀仏(なむあみだぶつ)---阿彌陀様に帰依しますという意味。

阿彌陀とは---永遠のいのち、無量の光のこと。



玄奘三蔵像

ここからスタート。起承転結の起に当たります。

摩訶(偉大という意味)**般若**(智慧)**波羅蜜多**(向こう岸)**心經**(一番大切なお経)

---彼岸へ渡るための偉大な智慧の一番大切なお経。彼岸に渡るとは「智慧の完成」「悟り」ということ。

観自在菩薩(かんじざい ぼさつ)---観音様のこと。偶像ではなく、自由を得て人間らしい生き方を願う私たちの象徴そのものを表現したものが仏像である。

観音とは----音を観る。音声・言葉の底に何があるか掴み取る。たとえば、

●京都紫野の大徳寺を開基した**大燈国師**(だいとうこくし 1282-1338 鎌倉時代末期)は軒ばたに落ちる雨だれの音をきいて次の様に詠じられたそうです。

「耳にみて 眼に聞かならば 疑わじ おのずからなる 軒の玉水」五感から得るものだけではなく、その底に横たわる何かをつかむ能力を修行により研ぎ澄ませということか。

●盲目の国学者**堀保己一**(江戸時代 1746-1821)は耳で読んでいたそうです。

●ドイツの**ルディガー・ガム**(Rüdiger Gamm1971-)さんという人は22の12乗のような計算の答えを、暗算でわずか4秒ではじき出すそうです。計算する時は数を形と色に変換しそれを組み合わせて計算するそうです。**サヴァン症候群**の人も、このような特殊な能力を秘めていると言われていています。凡人には理解しがたい能力です。

例えば「目に見えるものだけが存在する」と割り切らないで「目に見えるものは目に見えないものの一部が現れただけ」だという認識が必要だということなのです。

如来(位は上⇨菩薩に姿を変えることもある)>菩薩(人間界との取次役)

菩薩とは----他人の幸福を自分より優先的に考えられる修行者のこと。----なかなかできない。

行深(修行を深く行う)**般若**(智慧)**波羅蜜多**(向こう岸という意味)**時**(ぎょうじん はんにゃ はらみつた じ)---彼岸(向こう岸)にわたるための偉大な行(6つある---**六波羅蜜**という)を深く行なう時

六波羅蜜とは----最後の解説ページ参照

イ. **照見**(観ること)**五蘊皆空**(しょうけん ごうん かいこう)---人間の持っている**五蘊**はすべて空である。その認識をもてば一切の苦しみから救われる、という意味。観音の「観」と「照見」は同義語です。

ロ. **度**(救うという意味)**一切**(すべて)**苦厄**(苦しみや災厄) (ど いっさい くやく)---観音様が私たちの一切の苦を救ってくださる。

イ+ロが般若心經の「主文」です。

さらに「空」とは 般若心経における核心の思想である。

「空」を悟れば般若心経の 7 割は理解したといえるそうですので、これに力点を置いて以下調べました。

五蘊(ごうん)とは---身体の中に包んだ五つのもの。

「蘊」とは----はたらきをしながら寄り集まっているもの

- 1.色(しき)---物質・物 目に映るものすべて 変化するもの肉体など---客観の世界
- 2.受(じゅ)---物を見て感じ受け取ること。花がきれいだとかいう感覚。

眼(目で見える)耳(耳で聞く)鼻(鼻で嗅ぐ)舌(舌で味わう)身(身体のこと)意(心のこと)(げんにびぜつしんい)---体を感じることを心で意識すること。仏教では「六根」といいます。

「六根」が見、聞き、嗅ぎ、味わったもの「色*」「声」「香」「味」「触」「法(思慮が考えた思想・思い)」でこれを「六境(ろくきょう)」といい、「六根」と対象します。

ちなみに、こころのもつ六種の働き「見」「聞」「嗅」「味」「触」「知」を「六識」といい、「六根」「六境(ろくきょう)」「六識」を合わせたものを「十八界」といいます。

「五蘊(ごうん)」の「色」と「六境(ろくきょう)」の「色*」は意味が違うので注意。

「色*」は眼が見る対象、形の意味ですが、「五蘊(ごうん)」の「色」は「六根」が対象にする全てを意味します。「色*」「声」「香」「味」「触」「法」の全てが「色」という言葉でくくられているのです。「色」はこの両方の意味でつかわれることがあるので注意。

- 3.想(そう)---思うこと。大きいとか小さいとか 何色をしているとかいう知覚。

特定の方向に気持ちが志向すること。

- 4.行(ぎょう)---思ったことを認識する、認める。美味いとかまずいとか意志の作用。
- 5.識(しき)---人間の中にある物を感じる心。認識の識です。脳で認識蓄積されたもの。

2-5 は目に見えない自分の主観の世界。心の働き。「受」「想」「行」を行う主体も「想」である。

1-5 がそろって初めて認識ができるという。認識できなければ無いのも同然である。

世の中すべてのものは「五蘊」で形成されていて、それは「空」であると言う。

一見確実に存在していると思えるものも、よく見れば、ただそのように見えるだけで、「色」「受」「想」「行」「識」がパーツで集まって合成されているので実体は無いと考える。集まったパーツは必ず散ってゆく。これを「空」と言っています。

物があっても自分で感じなければ無いのと一緒である。認識するところから煩惱も生まれ

る。執着心・八苦もうまれる。しかし**五蘊**が「空」ならこれらから脱出できるということ。

例として「六根」の「色*」を一例として取り上げてみます。

ここに観葉植物があるとします。

葉からの選択された反射光エネルギーが空気という媒体を通過して光情報は眼の角膜→瞳孔→水晶体→硝子体を通り、目の網膜に届きます。

網膜はカラーを感じる約 500-600 万の錐体細胞、白黒しか感じない 1.2-1.4 億の桿体細胞があります。このスーパーCCD により光エネルギーは化学情報に置き換えられ、次に電気情報に変換され脳内に画像を立ち上げますが、人間の進化の過程からカラーでの画像分解能力はあまり良くありません。詳細にはこの過程の中で葉も中間媒体も常に条件が動いて変化しています。

つまりこの流れの中で物(葉)は見え続け、聞こえ続け、それを見た目も、聞いた耳も変化し続けています。変化するから関係し合え、関係するから見えたり聞こえたりします。

変化するからこそ、眼に見え、耳に聞こえるのだと考えます。

「色」とは物であり変化するもの、形が崩れていく物を意味しています。エントロピー増大の法則のことか？

写真とは真実を写すですが、西洋でのもともとの始まりは **photograph** でその意味は真実を写すのではなく、光を描くというものです。ですから写真は実体とかけ離れ形が崩れた、しかも二次元情報に変換されたひとつの芸術作品で油絵、ダリやピカソの絵と同類です。

従ってあらゆる現象は単独で自立した物としては成り立たず、無限の関係性のなかで絶えず変化しながら発生する出来事であり、それは秩序から無秩序の方向に変化しつつあるという見方をします。これをお釈迦様は原因→結果:因果=縁起と言われました。

お釈迦様はこれこそが宇宙の実態であり「空」となづけました。宇宙も小宇宙である人間も「空」であり絶えず変化していて実体はないと考えました。

よって「全体」は「個」の集合ではないと判断しました。

「空」とは

何もない、ゼロという概念も含まれますが、全く何もないといっているわけではありません。

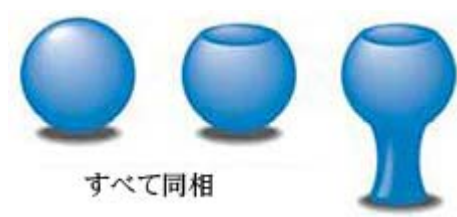
例えば万年筆を例にとれば種々の部品が組み合わさり、かかわりあって出来上がったものであり、それが万年筆と名付けられているに過ぎないと考え、**実体がない**と表現しています。ゆえに、すべての存在は相互にかかわりあってこそ、存在の意味がある。このような事実を「空」と言うようです。実体がないので「空」には始めも終わりもないのです。

物理的視点で考えると、万年筆も究極には分子、電子、原子さらには素粒子が集まってできたものであり、万年筆ができた瞬間から様々な関わり合いの中で使用され、廃棄され、燃やされて気体になったり、別の材料として再利用されたりして移り変わり、別の物とし

て生まれ、それがまた使用され破棄されるという流れを繰り返している。しかも素粒子から先は科学的にはまだ十分解明されていませんが、素粒子レベルでは、粒子はエネルギーに変換されたり、粒子は「粒」であると同時に「波」でもあるらしいところまではわかっているようですが、それ以上は解明されていませんが、万物が時とともに「縁起」の理屈により移り変わりゆくものであり、万年筆はその流れの中の一瞬を写真を撮るように人の脳裏に収まっただけのものであるという事実を「空」と考えるようです。

よって「空」の概念としては森羅万象すべて原因があつて結果を伴いながら、相互にかかりあいを持ち、形ある物はいずれは崩れ、また新たに誕生するように移ろいゆく状態であり、特別に姿、形があるというものではない、と考えたらどうでしょうか。

ドーナツもカップも同じと定義する位相幾何学(topology)を連想しました。形が変化しても同じものとして数式展開でき、物体の位置や速度といった量が常に揺らいでいる量子力学の世界にも使われていますが、社会現象含め移ろいゆくものすべてにこの数学の発想が使えないかと思いました。



テレビのどこかの番組で聞いた話ですが、お釈迦様やイエスキリストの体を構成していた材料を分子原子レベルで考えれば、現代の人を構成する原子・分子の中に幾らかお釈迦様やイエスキリストのそれが含まれていると科学的に計算した人がいるらしいです。

「空」が移ろいゆくのは熱力学でいうエントロピー増大の法則に従った変化と考えていいのでしょうか。

従ってお釈迦様は人を含むあらゆるもの(色)は「空」である。また「空」は物(色)でもあるといわれています。

上記の「あらゆる現象は単独で自立した物としては成り立たず」固定的実体はなくすべては関係性の中で変化し続けていることを「空」の性質:「空性」とも表現するようです。

「人間」「犬」「鳩」「蜂」それぞれ「六根」「六境」が異なり「色」も異なってくるわけです。したがって「五蘊」も異なります。よって同じ葉をみても同じものに見えないはずであり、人間の見たものだけが真実の姿とは言えないと考えたのです。

「空」は常に特定の「色」として出現するしかないのです。

我々は自分で感じ取った「色」から背後にある「空」という全体性の片鱗を感じ取るしか方法がありません。

逆に「空」は「縁起」からあらゆるものが現象として出てくるといえます。

どうやって「空」を感じ取ればいいのか？

従ってSF的になりますが「六根」「六境」とかを定義しなくてもいきなり「空」を捉えることができる生命体がいてもおかしくないのです。

将来人間は「空」を捉える人工知能とかは 作れるのだろうか??

たまたま「縁起」によって集まった体と精神機能の集合体が「私」であり、それは絶えず無数の関係性の中で変化し続けていることになります。

なぜすべては変化し続けるのか?----すべてが「不完全」だからといわれています。

自分に固定的実体など無いと悟ることで謙虚にもなれるはずということです。

お釈迦様は「色」は「空」のみならず「五蘊」も一切「空」であるといっているのですから「受」「想」「行」「識」も「空」であるといわれています。

例えとして人が石につまづいて転んだときのことを考えると、

ころんだ時の傷みや、次はころばないようにしようとか「受」「想」「行」「識」の流れを自分なりの脳のくせで認識しますが、ころんだ時点ですでに「私」が関わったことになり、自分本位、自己中心的なしかも一時的認識現象ということになります。ということはあるのままの実体ではなくなるのです。

従って「色」の場合と同じく現象は単独で自立した物としては成り立たず自己中心的なしかも一時的認識現象であるので お釈迦様はこれも「空」であると定義しました。

合理主義哲学の祖と言われるフランスの哲学者、数学者であるデカルト(René Descartes, 1596-1650)は「我思う、ゆえに我あり(I think, therefore I am.)」という名言を残していますが、仏教では「我」とは「五蘊」でありそれは「空」で実体がない移ろいゆく幻・錯覚のようなものとして捉えます。

我ありと自分が勝手に思っているという見方です。

人間は「受想行識」において心があるから物質的欲望、精神的欲望(煩惱)などを感じ悩む金持ちになりたい、出世したい、褒められたい等々 108 つ以上はあるようです。

仏教はこの煩惱の根を断つことにより悩みがなくなるといいます。

人間の「苦」とは何か

四苦八苦について----四苦とは---「生老病死」のこと。「八苦」は「四苦」に加えて

「愛別離苦(あいべつりく)」---愛する人から分かれる苦しみ

「怨憎会苦(おんぞうえく)」---嫌いな人とも顔を合わせる苦しみ

「求不得苦(くふとつく)」---ほしいものが手に入らない苦しみ

「五蘊盛苦(ごうんじょうく)」---人間の肉体、心が盛んで煩惱が燃え盛る苦しみ

不満----乏しい時、敗れた時の苦

不服----満ちた時、勝った時に味わう苦

「煩惱」とは----身体や心を悩ませ、かき乱し、汚す精神作用の総称。

「五蘊」が「空」なら当然「煩惱」も「空」であ。

この「四苦八苦」から解放されることを「解脱」(サンスクリットでは「涅槃」)といえます。

人間は「五蘊」があるため色々な欲に執着し、これが苦しみのもととなります。

「五蘊」を断てば苦しみから救われる=観音様は「五蘊」は「空」であるという。

疑問・感想

「五蘊」を断てば人生の苦しみから救われるかもしれないが人生の楽しみもなくなるのではありませんか？

X線、電磁波のような「六根」で感じえないものも、科学の進歩により目に見えるようにすることができている。ミクロの世界も然りである。

欲望に触発されて科学技術は進歩してきた。ほかの学問も。このような欲も消すのか？

欲望には限りがないが。結論としては心の問題が大事なのか。苦しみを体験してこそ他人の「苦」を理解できるようになるということですか。

ここまでが起承転結の起

起承転結の承は

舍利子(しゃりし)--- 舍利子よ。実在した人の名前。釈迦の弟子のひとり

色不異空(しきふいくう) ---色は空に異ならず。

「色」とは---目に入るものすべて。森羅万象のこと。

空不異色(くうふいしき)---空は色に異ならずでもある。

物があっても気が付かなければ無いと同じで、無いということも、あると同じだ。

色即是空(しきそくぜくう)---色は即空である。**色不異空**と同じ

空即是色(くうそくぜしき) ---空は即色でもある。**空不異色**と同じ

反対側、裏側から繰り返す言うところが仏教のすごい(うまい?)ところ

「空」とは追加---一口で言えば現象があっても物体があってもそれを感じる心がなければ、ないのと同じだということ。見えないものを見る力が悟りにつながる。

物があっても心がなければ無いと同じ。物より心が大事である。

世界は常に移ろいゆくものであり、それが故に美しい。世の中の実体として見えるもの「色」は移ろいゆく事物の瞬間を五感の感ずる範囲で自分の脳裏に焼きこんで認識したものに過ぎず、誰にもわからない、言葉でも表せない何か本当の真理の実体、即ち**移ろいゆく世界をつかさどる法則**があるはずだと考えそれを「空」とする一つの宇宙観である。移ろいゆく事物の瞬間(「空」の一部)を切り取り収める欲望が芸術であり、科学でもある。よって人間が過去から作り上げてきた文化の根底には「**色即是空**」「**空即是色**」のメカニズムがあるはずである。

移ろいゆく世の中や自分という存在は巨大な見えない「空」の中に存在している一部であるという。つまり「**空即是色**」である

色=a 空=b とすれば a≠b b≠a かつ a=b b=a ということか。

色不異空、空不異色とは---色は空に異ならず。空は色に異ならずとは

人は我を忘れて物事に打ち込んでいる時(無心になるとき)それ以外のものの「五蘊」は無いに等しい無となる。よってすべての現象はないと思えばないし、あると思えばある。

「俺の住まいだ、自分の財産だ、おれが努力して勝ち取った地位だ」等と自我にとらわれることをご破算にして、よく考えれば、さまざまな相互関係の中で、うつろいゆく変化の波の中で生かされ たまたまそのような境遇になっただけである。と考えれば冷静に状況を判断できるということです。

「釈尊のことば」として色即是空、空即是色を次のように言われています。

「これあるに縁(よ)りてかれあり。これ生ずるに縁りてかれ生ず。これなきに縁りてかれなし。これ滅するに縁りてかれ滅す。」

「心」に認識されればあるし、認識されなければ無い。「空」とは「ない」ということだといえますが、また「ある」ともいえるのです。

「ない」と「ある」の両方の性質をもつものが「空」であるという。

ある物を見たとき A でもあるし、同時に B でもあるという現象は芸術の分野ではわかりやすい例があります。いわゆるルビンの壺と言われる類のものがそれです。



光や電子も粒であり、波でもあり、双対性を持っています。どちらの解釈が正しいと言うことはありません。これらは双対性の例です。ホログラフィー原理も三次元像を二次元の干渉縞に記録する場合も双対性の例のようです。

社会現象はもっと複雑です。ある物を観たとき A でもあるし、B でもあるし、C でもあるし、D でもある・・・という現象はたくさんあります。例えば

量子力学の最新情報によれば重力ホログラフィーという理論で重力を含む三次元空間は重力を含まない二次元空間と双対性があり同等であるようです。J. マルダセナ (Juan Maldacena 1968- 米プリンストン高等研究所) によれば私たちが感じている重力や空間次元の1つは、もっと次元の低い時空での粒子の相互作用から生まれる一種の「幻」なのかもしれないようです。(日経サイエンス 2006年2月号より)

色即是空、空即是色のこころを茶道に組み入れたのが「清寂」(静寂ではない)です。

「色」を「清」に、「空」を「寂」と受け取り組み入れられたそうです。

「価値なき物質現象に美を発見するこころ」に通じ合えるものがあるようです。

考察

人間は形ないものを形あるものと執着し、煩惱にふりまわされて、四苦八苦している。

しかし四苦八苦も移ろいゆくものであり永遠ではない「空」であるのだから、その一瞬を切り取り見える形にする努力をすれば救われる何かが見えてくる希望があるというか。

その執着しているものすべて「五蘊」が「空」で幻であるとするならば、生きていく希望が失われてしまいます。人間は欲望があるからこそ生きていける。

あらゆる文明・芸術・科学等過去の人にも飽くなき欲望に駆られ、心を「無」にして一心不乱に努力してきたはずである。つかみどころのない見えない「空」の一部でも見える形にしたいという欲望が文明・芸術・科学の発展をもたらしたのではないか。

「空」とは何物にも捉われない心、真の自由というように解釈して、むしろその中に無限の可能性をはらんでいると考えるようです。

あらゆることを「空」であると考え、すべてをリセットする、Crash and build、zero base で物考えることにより自分の頭で考え判断することにより、break through するような発想が生まれるということのようです。物の見方を 180 度切り替えられる手法なのか。

ピカソ(Pablo Picasso, 1881-1973 スペイン)にも影響を与えたスイスの画家 パウル・クレー(Paul Klee 1879-1940 スイス)のことばに「**芸術は見えないものに見えるようにする**」という言葉がありますが「空」に通ずるものと思います。

スティーブ・ジョブズ(Steven Paul "Steve" Jobs, 1955-2011 米)が残した有名なことばに、” Stay hungry, Stay foolish.” がありますが、彼は禅によって、見えなかったものが見えるようになり、聞こえなかった声が聞けるようになったと言っています。芸術家たちと同じように「見えないもの」、「聞こえないもの」を表現しました。

ジョブズが率いたアップルの革新的なプロダクトは、「見えるもの」や「聞こえるもの」を調べて分析するようなことから決して生まれなかったといわれます。

何気ない日常の変化の中に「空」なるものの一瞬を逃さず切り取る能力を高めた人が、多くの人から見えない「空」の一部に見えるようにしてくれた喜びを多くの人に与えたということでしょう。

自分の考えを述べる時に他人の言葉をやたら引用するのではなく、自らの考えを自らの言葉で表現する努力をすることが修行のひとつであるように感じました。

さらに見えないものが見えるようになるとは、字で書いてある物だけにとらわれていると、字で書いてないものを忘れてしまう。五感で感じたものも、そのものではなくその裏に潜むものまで洞察できるように修行しなさいと言っているようです。

ニーズが見えない成熟化した市場で新しいビジネスを作り出すには、「見えないもの」や「聞こえないもの」を具現化することが必要なのだと気付くべきです。

「どんぐりの背比べの競争成熟社会から日本は抜け出せ」と祈念せずにはいられない。

幼少期から自分が積み上げてきた「脳のくせ」を取っ払えといっても言うは易く行うは難しか。？「生きている一瞬一瞬に意義を見出す努力をせよ」ということでしょうか。

最近のテレビの科学番組で知った話ですが、最近の脳科学者(ワシントン大 マーカス・レイクル(Raichle, Marcus E.)教授 1937-米)によれば、脳の Net work 解析により脳が一日に消費するエネルギーの 70-80%はぼんやりした、無意識時に消費されることを発見したそうです。ぼーとして何も考えないとき、無意識の時こそ脳は大量のエネルギーを使って **default mode network** というものを整理しているようです。

座禅・瞑想や写経や読経等一心に何か打ち込んでいる時は似たような状況にあると想像されます。そこには世間の常識、雑念、妄想、煩惱等をリセットする手段として有効な何かがあるため昔から続いている手段のような気がします。

京都の竜安寺、醍醐寺とか天龍寺、三千院、詩仙堂等々の庭園を前にすると、ついぼーとして何も考えないでじっと庭園の美しさに見とれてしまいますが、このようなときも脳が活性化されているのでしょうか。何か禅の境地がわかるような気がします。

従ってここは煩惱を上手くコントロールする術を身に着けて、世のため人のためになるようなことを生きているうちにしなさいと言っているはずです。

参考までに京都の「曼殊院(まんじゅいん)」に伝わる「根本法華経見聞」によれば

氷を「色」、水は「空」とし、ここに「寒」という「縁」が水に作用して、氷という「色」になる。よって「色」は「空」である、と説明されている。水が「因」、寒が「縁」、氷が「果」ということ。因果関係で説明しています。

なお、**ダライラマ 14 世(1935-中)**の「空」に対する考えは最後の解説を参照。

受想行識(じゅそうぎょうしき) --- 「五蘊」のところを参照

亦(またという意味)**復如是**(やくぶによぜ) --- それもまた同じだという意味

核心となる教えの部分です:-**華嚴の教え**(最後の解説を参照)

因縁とは---すべてのことは原因があつて、それに縁がかかわって、そして結果ができる
お釈迦様の悟りのひとつ:**万物は因縁より生ず**。縁起ともいいます。

疑問・感想

現代文明の科学技術の恩恵に浴している我々には「色」に対しての「五蘊」が感じられなくなっている部分があるのではないか。草・木・石・岩・星などを見たとき感じられなくなっている何かがあるような気がしてきました。

しかし文明発展のおかげで現代の人はメディアの力等により昔の人より何千倍何万倍も「五蘊」の力を得ているのではないか。TV、電話、電子顕微鏡、宇宙技術、X線CT等々。しかし人間は、限りなく強力な「五蘊」を手に入れてもそれによって同じだけ沢山の欲望・煩惱・四苦八苦の数も増大してくるので、断つべき煩惱も昔の人より増えてきているはず。現代人はこの断つ術を一層学び悟る努力をすべきだと感じます。そうしないと昔の人のような研ぎ澄まされたわずかな「色」のうつろい・流転を感じる「心」が薄れてきてしまうような気がします。

しかし一方現代は昔より情報共有能力は遥かに生かせる環境の中にいるので「個」の力だけでなく、「集団」の力により乗り越えられそうか気もします。

舍利子(しゃりし)---人の名前。釈尊の弟子。実在した人。

是諸法空相(ぜしよほうくうそう)---このもろもろの法は空相(相とは姿・形のこと)である

法---この世の全ての存在という意味。自然界の仕組み。物質現象。森羅万象

この諸法(しよほう)とは、直前の「五蘊」をさしています。

空相とは---あらゆる事物が空であるというありさま。

「色即是空」をもう一回言っているようなもの。=法即是空か

不生不滅(ふしょうふめつ)---生ぜず滅びず。これは納得しないという人もいる。

人は生まれ死に花は咲き枯れるではないか

不生不滅とは、生死がないのではなく、生死がありながらも生死に引きずり回されぬ生き方。かけがえのないたった一度の一生を、たった一人しかない自分を、今日という日は二度とないのだと、ひたすら生かされ、生きてゆくのが永遠に生きることでありといひます。

不垢不淨(ふくふじょう)---汚れない、清らかでもない。納得の点では同上

どのように汚く見えるものでも、必ず美しいものが宿っている。

不増不減(ふぞうふげん)---増えもしなければ減りもしない。納得の点では同上

エネルギー保存の法則とは違い。「五蘊」という物質、ところを統一した「空」の次元で「増えもしなければ減りもしない」といっているわけです。

しかし「般若心経」の思想は「生」「滅」「垢」「淨」「増」「減」はそれが発生しているように思えるだけで本当は「不生不滅」「不垢不淨」「不増不減」であるという。

即ち、この世のあらゆる現象や目に見えるものは、心の働きによっておこるもので、心の働きの「縁」が加わらなければ、この世の全てのものは「ない」と同じですと言っている増えたとか減ったとかいうのも脳と感覚機能の連合による錯覚というしかない勝手な判断

ということ。生まれたとか死という認識もありのままの姿ではなく脳内に作られた大雑把な概念に過ぎない。

大脳皮質が幼少のころから積み上げてきた「知恵」を取り除かないと「空」なるものの概念化はむずかしいようです。

考察

ここで少し**横道にそれる**とは思いますが、浮世ばなれしているという点では似ているところがあります科学の理論物理について**不用意に宗教等の門外に当てはめようとする**ことには**注意**するべきと言われていています。「空」や「無」の概念との比較の意味でも参考にしたいと思いました。

しかし、理論物理の国際会議などでも「超弦と物性の**邂逅**(かいこう)」とか宗教人が使うような難しい昔の単語を使ったりしています。

量子力学では電子は「**粒子であると同時に波である**」ということはニールス・ボーア(Niels Bohr 1885-1962 デンマーク)が提唱しましたが、今まで多くの人によって実証されてきた事実です。しかし、これは頭の中で容易に概念化できない。「**空即是色**」であり「**色即是空**」でもあるという考えに通じるものを感じます。いづれも一見対立するような視点の双方によって相補うように支えられているように思えます。奇妙な振る舞いをするといわれる量子の世界について簡単に触れておきます。

26 歳のとき量子物理学の核心といわれる**不確定性原理**を提唱した**ハイゼンベルク**(Werner Karl Heisenberg, 1901-1976 独)は電子の位置と運動量は同時に決定することはできない。位置と運動量の積が一定=プランク定数 $h=6.626 \times 10^{-34} \text{ J s}$ に粒子の位置や運動量が関連づけられているため、電子のような**極小の世界では、不確定性の大きさをこの h が定めているため**電子の位置と運動量は同時に決定することはできない現象が起きてしまうようです。量子の領域においては振動数がエネルギーと関係してくるため、物質の質量やエネルギーや運動量のような特性が量子的な不確定性にかかわってくるようです。

製鉄所の鉄の温度を測定することに端を発して放射に関する**プランクの法則**(1900年)を導出する中で物理学における基礎定数の一つとなったプランク定数を定義した独の物理学者**マックス・プランク**(Max Karl Ernst Ludwig Planck, 1858-1947 独)は有名ですが、この**プランク定数**は量子論的な不確定性関係と関わる定数であり、 $h \rightarrow 0$ の極限で量子力学が古典力学に一致するなど、量子論を特徴付ける定数であります。

光子の持つエネルギー(エネルギー量子)はその振動数に比例し、その比例定数がプランク定数と定義されます。

$$\varepsilon = h \cdot \nu = h \cdot c / \lambda \text{ -----(1) } \quad \nu \text{ は振動数} \quad \varepsilon \text{ は光子のエネルギー} \quad h \text{ はプランク定数} \\ \lambda \text{ は波長}$$

プランクの伝記によればニュートン定数 G 、光速 c 、プランク定数 h を組み合わせるとある長さをもった量が得られることを発見し、プランク定数よりもこちらに心をひかれたらしいです。なぜなら G, c, h ともに自然界の性質から来た数字であったからです。

考察

ちなみに G, c, h の各々の値は

ニュートン定数 $G = 6.67384 \times 10^{-11} \text{ m}^3 / \text{kg s}^2$

光速 $c = 299\,792\,458 \text{ m/s}$

プランク定数 $h = 6.62606957 \times 10^{-34} \text{ m}^2 \text{ kg} / \text{s}$

ですので、3者の関係を次元解析を使って計算してみましたら次の(2)式が得られます。

$\sqrt{(Gh/c^3)} = 4.05 \times 10^{-35} \text{ m} \dots\dots(2)$ これを仮に Λ とすれば Λ は長さの定数と言えるのだろうか。確かにある長さ Λ が得られる。しかも現代のひも理論の紐長さにはほぼ匹敵します。三次元空間における長さの最小単位のような予感がします。

ついでにもう一つ h と c にかかわる面白い例を紹介します。

電子の電荷: $e = -1.602176565 \times 10^{-19} \text{ クーロン} = -1.602176565 \times 10^{-19} \text{ As}$ (アンペア・秒)

真空の誘電率: $\epsilon_0 = \text{約 } 8.854 \times 10^{-12} \text{ F/m}$ です。単位 F :ファラッド, C :クーロン, V :ボルト

一方、 $F = C/V = \text{m}^{-2} \cdot \text{kg}^{-1} \cdot \text{s}^4 \cdot \text{A}^2$ であるので $F/m = \text{m}^{-3} \cdot \text{kg}^{-1} \cdot \text{s}^4 \cdot \text{A}^2$ となるのでよって

$\epsilon_0 = \text{約 } 8.854 \times 10^{-12} \text{ m}^{-3} \cdot \text{kg}^{-1} \cdot \text{s}^4 \cdot \text{A}^2$ と表せます。

h, c, e, ϵ_0 の間の関係として 1920 年代から $e^2/(2 \epsilon_0 hc)$ が無次元数になることが知られていました。(e^2 は e の 2 乗)

ちなみに上の数字を代入して計算すると $e^2/(2 \epsilon_0 hc) = 1/137.036$ という無次元数になることが知られています。

現在はこれは微細構造定数 α と呼ばれ電磁相互作用の強さの物差しとなっています。しかし、なぜ数値が 137.036 なのか、いまだ誰にも分らない疑問になっています。

量子論を特徴付ける定数であるプランク定数 h と、相対論を特徴付ける定数である光速 c と関連付けている量といえるようです。

物の本によれば電子は原子の周りを 1 秒間に 10 京 = 10^{17} 乗回まわっているようです。

原子の直径は 0.1 ナノメートル = 10^{-10} 乗 m ですので、電子の回転速度は

$\pi * 10^{-10} \text{ 乗 } \text{m} * 10^{17} \text{ 乗 } \text{m/s} = 31,400 \text{ m/s}$ 秒速約 3 万キロという猛烈な速度回っていて、飛行機のプロペラのような状態になっているので、人の手が壁に触れても手がめり込むことはない訳です。しかし 10000 度以上にもなると電子は原子に拘束されなくなり、いわゆるプラズマ状態になります。

フランスの物理学者 ド・ブロイ (Louis-Victor Pierre Raymond, 7e duc de Broglie、

1892-1987 年)が 32 歳の時 **ド・ブロイの方程式**を光子、電子をはじめすべての粒子に対して次の関係を提唱しました。

$\lambda = h/p$ -----(3) λ は波長---波の特性 p は運動量---粒子としての特性 波と粒子の二重性をあらわしています。

ド・ブロイは原子は物理的に設定された振動数で振動する楽器のようなものだとイメージしました。

現在ではアインシュタインの $E=mc^2$ とともに実験的に裏付けられた式(1)(3)は**量子物理学の基本式**になっています。

一方、**シュレーディンガー**(Erwin Rudolf Josef Alexander Schrödinger、1887-1961 オーストリア)は**ド・ブロイ**の式をさらに一般化して運動量と波長が連続的に変化する状況に対応できる**波動方程式**を確立しました。現在はナノテクのシュミレーションに広く応用されています(レンズ表面の薄膜設計等)。

電子の存在する空間が小さくなればなるほど、電子の波長は短く、運動量は大きくなり早く運動し、エネルギーも大きくなります。

この運動量と電子と陽子の引き合う力がバランスする大きさが原子の大きさになり、原子の直径は陽子の 10 万倍あるといわれます。

式(3)を仮に人のスケールに当てはめると 68Kg の人が時速 3.2Km/h で歩くとすると運動量を持つと同時に波長も持つはずですが、運動量が原子スケールよりかなり大きすぎるため波長は 10^{-23} 乗となり感じることはできません。

しかし、粒子世界においては波長が重要な意味を持つようになります。

電子には波の性質があるため原子内の電子は原子全体を包み込むぐらいまで大きく広がり、原子核内の陽子や中性子も原子核全体に及ぶぐらい大きく広がっています。

現在では電子は波とみなされ、原子核の周りを環状に取り囲むだけでなく、半径方向にも波打っているといえます。

波はエネルギーと運動量を持つことができ、かつある場所から別の場所にある速さをもって移動させることができ、かつ局所化させて伝えることができます。糸電話の糸のように。波も粒子的振る舞いをしますが、アインシュタインの光の粒子説以降 1925 年頃には光、電子などの粒子は波と粒子の両方の性質を持つことが定着しました。この波動性が小さな世界を観察することを難しくしています。

光学顕微鏡より X 線顕微鏡のほうがより大きな解像度が得られるように、小さいものを観察するにはド・ブロイの式により粒子の波長を短くする必要があり、そのためには莫大なエネルギーを粒子に与える必要があり「CERN」のような巨大な加速器を必要とすることとなります。

粒子は生成されるときと消滅するときには粒子として振る舞いその間の期間は波のようにふるまう(粒子はどの瞬間でも動いている空間を全て占めていると考える)と現在では考え

ます。そのためナノスケールの薄い壁を波として透過できトンネル効果といわれています。これは走査トンネル顕微鏡に応用されています。

不確定性原理を提唱した**ハイゼンベルク**は電子の位置と運動量は同時に決定することはできない。位置と運動量の積が一定=プランク定数 $h=6.626 \times 10^{-34} \text{ J s}$ に粒子の位置や運動量に関連づけられているとしました。

$\Delta x \Delta p = h$ -----(4) h =プランク定数 Δx :位置のあいまいさ(不確定性) Δp :運動量のあいまいさ。位置が精密に決定されればされるほど、その時の運動量が精密にはわからなくなる。逆もまた然りであるということです。

$\Delta t \Delta E = h$ -----(5) Δt :時間のあいまいさ ΔE :エネルギーのあいまいさ

この原理も物質の波動性からもたらされる結果であるといわれています。

電子のような**極小の世界**では、**不確定性の大きさをこの h が定めているため**電子の位置と運動量は同時に決定することはできない現象が起きてしまうようです。量子の領域においては振動数がエネルギーと関係してくるため、物質の質量やエネルギーや運動量のような特性が量子的な不確定性にかかわってくるようです。

このように量子の世界を顕す数式にはプランク定数が登場します。波長が運動量と関係したり、振動数がエネルギーと関係するのは量子の領域においてだけです。

このように考えれば、神秘性は少し薄れ少しは現実味を帯びてくるのではないのでしょうか。

以上のような量子理論は多くの実験の裏付けに耐え、工業製品への応用もされつつありますし、現在までのところ、信頼できる理論として扱われています。

しかし、**アインシュタイン**(Albert Einstein、1879-1955 独)は死ぬまで「神はサイコロをふるようなことはしない」と言って納得しませんでした。また**朝永振一郎**(1906-1979)とともにノーベル賞を受賞した**R.P ファインマン**(Richard Phillips Feynman, 1918-1988 米)は経路積分という手法で粒子に波は必要ない。粒子の振動だけで説明できることを実証しました。しかし、量子世界で起こっていることは波の振る舞いに非常にそっくりである。よって現在では波は便利なものであるし、波を使わない理由はないということで「波」説が一般化しています。

また、米国の物理学者**ジョン・ホイーラー**(John Archibald Wheeler, 1911-2008 米)は、現在の量子力学はまだ未発見の単純な奥深い核心理論の上にかぶさっている表層的・暫定的理論ではないかと位置づけています。

このような**科学的見識**を不用意に**宗教等の門外に当てはめようとする**ことには**注意**するべきとも言われています。しかし、**ニールス・ボーア**や**ハイゼンベルク**は論文の中で、波でもあり、粒子でもあり、空間に突然粒子が現れたり、消えたりといった**存在し、かつ存在**

しないというような量子力学の振る舞いが西洋的合理主義の中では概念化しづらいが、**東**における老子(BC600 頃)・**荘**子(BC369-BC286)や**仏**教の伝統的哲学思想との間に近縁性があるとも言っています。

科学により解明されつつある極大と極小の限界

数の数え方で東洋では大きいほうが 10 の 68 乗(呼び方:**無量大数**)西洋では google の呼び名の元になった googol(10 の 100 乗)などがあります。小さいほうでは東洋西洋とも 10 の -24 乗(呼び方:**涅槃寂靜**(東洋)と**ヨクト**(西洋))迄が知られています。東洋、西洋とも大きいほうを表す表現のほうが、昔から大きな値まで定義されていたようです。小さいほうは 10 の -24 乗迄ですが、現代物理学はそれ以上の 10 の -36 乗くらいまで思考実験を研究していますが、東洋的呼び名はどうなるのでしょうかね。

- 1m から 10 の 9 乗 m までの世界-----**ニュートン**(1642-1727 神学者でもある)力学の世界
- 10 の 9 乗 m ~ 10 の 18 乗 m まで-----**ニュートン**力学の世界
- 10 の 18 乗 m ~ 10 の 27 乗 m
(光で見える宇宙の果て) まで-----**アインシュタイン**相対性理論の世界
- 10 の 27 乗 m 以上は光では見えないので今世界は重力波望遠鏡でとらえようとしている。

- 1m ~ 10 の -9 乗 m まで-----**DNA** 等**ナノ**テクの世界
- 10 の -9 乗 m ~ 10 の -18 乗 m まで-----**CERN** 加速器の世界
- 10 の -18 乗以上を観測するには、観測する大きさ L の波長をもつ電子や陽子を衝突させ飛び散ったものを観測しています。しかし $\epsilon = h \cdot \nu = h \cdot c / \lambda$ -----(1) より $\epsilon \cdot \lambda = h \cdot c =$ 定数の関係があるので波長 λ が小さくなればなるほどエネルギー ϵ を大きくしなければならない。思考実験になりますが、仮に 10 の -36 乗 m のものを観測しようとするれば加速器の直径は 1000 光年の長さが必要になるといわれ仮に装置が実現しても粒子のエネルギーは膨大になり、その結果質量は膨大になり ($\epsilon = m \cdot c^2$ 乗より) 衝突したときブラックホールが出来てしまい、そこで観測が不可能になり、そこが長さの最小限界となるようです。

「**CERN**」の装置でもミニブラックホールができるかもしれないという話があります。これは、もし 3 次元以上の空間が微小世界に存在するならばプランク定数は 3 次元空間よりも大きいらしく、微小空間に 1999 年に**リサ・ランドール**(Lisa Randall、1962 年・米)がその存在を数学的に証明したという**余剰次元**が実在すれば「**CERN**」程度の装置でもミニブラックホール、あるいはブラックホールもどき(string ball)の粒子ができるかもしれないと言われています。もしそのようなことが確認されれば世紀の発見となるでしょう。

次にニュートン力学によれば地球からの脱出速度はご承知のように

Escape Velocity = $\sqrt{2GM/R}$ より 11Km/s ですが 今から二百数十年前、**ミッチェ**

ル(John Michell、1724年-1793年英)やラプラス(Pierre-Simon Laplace 1749年-1827年
仏)はこの公式から光すら脱出できない天体があるのではないかと考えていたようです。

式で表現すれば $c(\text{光速}) \leq \sqrt{2GM/R}$ より

$(M/R) \geq 6.74 \times 10^6 \text{ kg/m}$ となります。

これより、ちなみに 地球の質量は $5.972 \times 10^{24} \text{ kg}$ であるので**地球がブラックホールになるためには $R \leq 0.886 \text{ cm}$ 以下に圧縮された時、光でも脱出できないブラックホールになります。**

ホーキング(Stephen William Hawking 1942-英)の説(1974年)によれば量子の揺らぎによりブラックホールからは輻射熱が発生するようですがこの現象は宇宙背景放射の量子揺らぎと理論的に同じ機構だそうです。

微積分の確立によりニュートン力学が発展したように量子力学の分野においても新しい数学の確立が求められており、位相数学(topology)や重力ホログラフィー理論はもちろん数学上の未解決問題であるヤンミルズ問題(無限自由度の量子論をどうコントロールするかという問題?)、ブラックホール物理学等をキーワードとするような**新しい数学の確立**が望まれているようです。

ガリレオ・ガリレイ(Galileo Galilei 1564-1642 伊)は著書「偽金鑑識官」(1623年 59歳;教会におもねる偽学者を告発し、科学の絶対性を提起した書。)の中で、微積分が確立される以前の**古典物理学**の時代であったにも関わらず「**宇宙は数学という言葉で書かれている**」と主張しています。19歳にしてピサの大聖堂のシャンデリアの揺れから振り子の等時性を発見し調和振動への基礎を築いた大天才だからの重みのある言葉ですが、**科学は数学という言葉**を武器に、**自然の移ろいゆく姿を思考実験**することができ、一步一步着実に積み重ねて次の世代に継承して発展させていくことができるのに対して、宗教は言語による継承はできても、悟りの境地は個々の人間の修行により達成してくださいということになる。**科学における着想・ひらめき等が宗教における「悟り」にあたるのでしょうか。?**

注 アインシュタインまでを**古典物理学**、その後を**量子物理学**と呼ばれているようです。科学的话题に偏りましたので元に戻ります。

是故空中無色(ぜこくうちゅうむしき)

無受想行識(むじゅそうぎょうしき)

それ故「空」の中には「色」もなく「受想行識」もないと繰り返し言っている。

無眼耳鼻舌身意(むげんにびぜつしんい)---目も耳も鼻も舌も身体も心も無いということ。

無色声香味触法(むしきしょうこうみそくほう)---従って物が無いから見えない 耳が無いから聞こえない 鼻が無いから匂わない 舌が無いから味もない 身体が無いから触っても感覚がない---全てが無い。

無眼界(むげんかい)-----よって見る世界というものがない。

乃至(あるいは、または)無意識界(ないしむいしきかい)-----また意識する世界もない。
物心皆無---すべて無である。これが「空」の姿であるという。

「六根」「六境」「六識」すべて、すなわち「十八界」を「空」としなさいということです。
要は全てをリセットして自我、わだかまり、偏見・執着のたぐいを取り払い自由な身になりなさいということです。

「空」の一つの表れが「無」であります。囚われの無い自由なはたらきそのものです。
この境地になれば、例えば顔に眼、鼻、耳があることがあたりまえで不思議でなかったものが、不思議に思えてくる。腕が2本、指が10本あるのも当たり前と思えたものが不思議に思えてきます。このように日常不思議と思わず、何気なく見過ごしてしまう現象が、不思議に思えてくる。「十八界」のそれぞれについて、「無」の境地になり、いままで見えなかったものが見えるようになるよう修行しましょうということです。

この「空」を芸術的に受け止めて「無」の境地を大成したのが千利休(1522-1591 切腹; 戦国・安土桃山時代)とその師の武野紹鷗(たけのじょうおう 1502-1555)に代表される日本の「茶道」です。茶室を高価な調度品や美術品で飾り立てるのではなく、そのような華美を取り去さり、人工を加えない天地の姿に茶の理想を求め、質素と自然を作法の基準とし、人間の「こころ」を重視したゆき方を「わび茶」と呼んで広めました。わび茶の境地として藤原定家(1162-1241 平安-鎌倉時代)と「新古今集」の一首を次にあげます。

「みわたせば 花ももみじもなかりけり 裏の苔屋(とまや)の 秋の夕ぐれ」

「花をのみ まつらん人に 山里の 雪間の草の 春を見せばや」

文字を読んで字に表わされていること以上のことが浮かんできます。

人間は人の死に対して、肉体の死は認めても、魂の死まで認めることができない。

人の細胞は子孫に受け継がれ、また自身の細胞も7年で全て入れ替わるといわれています。

感想・解説

全てが無であるような人生は無味乾燥で生きる意欲がそがれつまらないと思う。

しかし、ここでは「心の働き」という縁が加わらなければ、無いのと同じで執着心も生まれないと解釈しています。

「五蘊」「四諦」「12 因縁」すべて「空」であるとは、そういうものに「とらわれるな」、「執着するな」と言うことです。

人間は「四苦八苦」の世の中に生きなければならないが、しかしそれでもこの世は生きるに足る世界で 一瞬一瞬を一生懸命に生きることが我々の生き方であると教えています。

無無明(むむみょう)----「無明」を断ち切れという教え。

「無明」とは---迷い、煩惱。思慮判断のできない心。十二縁起の最初に出てくるもの。

全てのことは人間の迷い・無知・愚かという「無明」の心から起こって、今の苦しみがあある。本能も「無明」から生じます。

「無」は単にないという意味と「無始」の意味をあわせもっている。始めもなく終わりもなく、いつとはなしに、果てもなく、別に教えられなくても、いつのまにか人間の根底に座を占めている。「無明」を無くそうとするよりもその働きを整頓することが般若の智慧に近づくことになるようです。

亦(同じという意味)無無明尽(やくむむみょうじん)---「無明」をなくし尽くすと同じ意味。

無無明=無無明尽とは----無明は「無いがままにある=あるがままに無い。」という二律背反そのままに実体を見据えるのが「空」です。煩惱は完全に断ち切るというよりは目が出た時に適切に摘み取り整理整頓するというように「ないがままにある」と考えることが人生を豊かにすると教えています。

煩惱があつてこそ悟りがある。煩惱は悟りの資本。生きている限り煩惱はなくなるならない。

乃至無老死(ないしむろうし)---また老や死も無い

亦無老死尽(やくむろうしじん)---老や死が尽きることも無い

無老死=無老死尽とは----「無明」が因で「老死」が果であり、逆に「老死」から思考をはじめ「無明」に原因を求める逆の思考をされました。

そこには因である十二縁起(最後の解説参照)も「空」とするのです。

平たく言えば「迷いもなく、迷いなくなることもない」言い換えれば迷いがあるままに、その迷いに惑わされぬ「こころ」を掌握することです。無明=煩惱という迷いはあつてもなくても邪魔にならないようになることです。

感想・解説

「老いも死もなく、老いと死がなくなることもない」の様に一時否定だけでは展望が開けないのでどうしても二次の否定が必要になります。このように思考を深めていく手法は他にもあります。例えば

米国のサンフランシスコ州立大学で教授および学長を務めた言語学者で後に上院議員も務めたサミュエル・I・ハヤカワ(1906-1992 米)の残した有名な概念に「抽象の梯子を徹底的に上り下りせよ」という「行動分析」の手法がありますが、これは例えば行動のようなコトであれ商品のようなモノであれ、「それにはどのような意味があるのか」を遡っていくのが「抽象の梯子を上る」ことです。意味のレベルを梯子にたとえているわけで、逆にモノやコトが「どのような要素で構成されているか」を考えることが、「抽象の梯子を下りる」ことになります。トヨタの原因分析手法のなぜなぜ(Why)を少なくとも5回くりかえして分析せよというのもこの手法に通じるものですが、般若心経の二重否定により思考の幅を広げると同じく有効な方法であると思います。

無苦集滅道(むくしゅうめつどう)---苦、集、滅、道即ち「四諦」が無い

苦・集・滅・道を**四諦**(したい真理のこと)という。**四諦の意味**は最後の解説を参照。

無智亦無得(むちやくむとく)---智や得も無い。一行法というものもすべて「空」である

智慧や悟りも永遠に未完である。

完璧に到達するゴールも、得られる完成形もない。

情報化時代で知識だけ満タンになっても体に溶け込んでいない。

目標を作って頑張るといこと、達成しても常に自分の心を一段上げてゆく生き方が求められる。

重荷を背負ってこそ成長がある。

以無所得故(いむしょとくこ)---それは、得ることが無いゆえに、所有することも無いのです。

知識への執着、信条への執着、職務への執着等々の執着を解くためには虚心坦懐というか「空」の状態にもってゆく智慧を身に着け自由な働きができることが理想です。

ここまでが起承転結の承

般若心経には「無」という字が 21 回も出てきます。

「無」には固定観念をリセットして新しく考え直すという思いが込められているようです。

「五蘊」も「四諦」も「八正道」も「十二縁起」も勝手に作った「区切り」でありそれらは徹底して全て「無」とせよ言われます。なぜか----「区切り」「規則」のような既存の捕らわれから解放し、世界のあり方を変えてしまうためである。

John Lennon の「imagine」もこの「無」に通じるものを感じるといわれています。

全てを否定したところに何か新しいものが生まれてくるだろうというパワーを与えてくれる希望を感じます。

全てがリセットされてしまうと凡人には取りつく島が無いので、「無」の連鎖を心に染みつかせれば価値観が次第に変わるので、自分が持っている本来の力により自分なりの価値観を生み出さなさいと言われてる。

全てを否定しなさいと言われて、それはできないと思うところがあなたの人生というか弱点ですということなのではないでしょうか。

中国ではインドから仏教が持ち込まれる前から**老子・荘子**は言葉や概念(物に名前を付けて概念を固定化する)に対する強い不信感を抱いていたそうです。

コミュニケーションツールとして文字により、情報を多くの人にある程度伝える効果はあるものの、一方で失われるものも大きい。文字言語が音声言語を矮小化して限定してしまうからです。言葉は口を通した響きとして初めて命を宿すと考えていたようです。職人が

技は見て盗めと言われたように**文書化したから**と言って**十分伝わるものではない**と。密教では大事な部分は口伝えで**伝承**されているようです。

玄奘三蔵がインドの仏教を翻訳するときも「空」の思想を受け入れやすい社会情勢となっていたようです。

文章・印刷物などを介して科学的に伝える「知」の様式ではなく別な「知」の様式が智慧であり悟りの境地というようです。わかったようでわかりませんが。

また言葉はコミュニケーションツールとして以外に自らの脳内の概念整理のために生まれたともいわれています。こう考えると**言葉による伝承はある程度の成果は得られても本当の真意は伝わらない**ことが理解できます。

「五蘊」も「四諦」も「私」の近視眼的、暫定的出来事であると理解したことで「智慧」を得たと思ひ込むことは誤りであり、知識を得た、理解した、ためになったと思っているうちは「般若波羅蜜多」には程遠いということらしいです。

「私」を滅するとは生れ出た時の本能的レベルの状態の生命力というか 35 億年の進化の DNA に刻み込まれた生命力の状態まで自分をリセットしなさいと言われていたようです。

起承転結の転はここからです。

菩提薩埵(ぼだいさつた)---菩薩のこと=未完成の道を生きる修行中の人=理想とする生き方。
奈良薬師寺 高田後胤官長の言:永遠なるものを求めて永遠に努力する人を菩薩という。

依般若波羅蜜多故(えはんによはらみつたご)--- **六波羅蜜**を行ずる(修行する)ことによって**心無**(心に何々が無いという意味)**罣礙**(さえぎる、妨げるという意味)(しんむけいげ)---心に妨げるものがなくなり自由自在になる。何もこだわりのない状態に心を置いて人のために尽くすことが自分に戻ってくる。→菩薩の生きる道→ただ**頑張るだけが道ではない**。

無罣礙故(むけいげご)---心にわだかまりがなくなるゆえに

無有恐怖(むうくふ)---不安・恐れから解放される---菩薩の境地になるということ。

だからと言って焼身自殺も恐れないというのは間違っている。なぜなら。「空」の状態即ち「私」をリセットした生まれながらの DNA が持つ本能は 60 兆の人間の細胞すべてが生きながらえるよう働いているのであり、自殺は「私」そのものを「命」と錯覚する勘違いであるからです。

遠離(突き放すこと)**一切**(すべてを)**顛倒**(逆さま、反対)**夢想**(おんり いっさい てんどう むそう)---ありもしない現実離れしたことをあると思ひ込むような妄想から遠ざかりなさい。

---物事を正しく見極めなさいということ。--これを般若の智慧と言っています

顛倒の例: たいした才能もないのに知ったかぶりして優秀だと思ったりするな。

できもしないことをできると妄想するな

究竟涅槃(くきょうねはん)---そうすると究極の涅槃に到達します。

「涅槃」とは---「四苦八苦」から解放されることをサンスクリットでは「涅槃」という。

一般の人の死を涅槃とは言いませんのでご注意ください。

「解脱」ともいいます。煩惱の炎が消えた平安・静寂の世界。菩薩という位に対して説いています。人間が幸福になるとは結局のところ、自由になることで、何物も恐れなくなることです。仏教は人間の幸福を、自由自在な心を得ることに求めます。

悟りとはこの「心無罣礙」を体得することのようです。

カメラのたとえ話

カメラは現在では誰が撮っても一定のレベルで撮れます。しかしアングルが悪いと被写体の良い面・美しい面を写し出すことができません。そのように自我に執着し、主義主張に縛られていると、心のカメラを自由に操作できなくなります。自由に操作できるころをもてば周囲に美を眺めることができ、敵意・悪意を持った人にも善なるものが見えるし、四苦八苦の現実の中にも幸せを写すことができるのです。このようなことが**般若の智慧**です。

三世(過去現在未来のこと:無限・永遠の時間を表す)**諸仏**(さんぜしよぶつ)

あらゆる場所に無数の仏様がいるということ。三世の諸仏も。多神教である

「一切衆生悉有仏性(いっさい しゅじょう しつう ぶつしょう)」の考え。-最後の解説参照

参考:**三世十方**(さんせじゅっぼう)---永遠の時間と無限の空間を表す。

依般若波羅蜜多故(えはんによはらみつたご)--- **六波羅蜜**を行ずる(修行する)ことによって

般若の智慧を体得して仏になれるんですよ ということ。

何物にもとらわれない物事を正しく判断する智慧=悟り=空の智慧を身に着けよう。

得(得ること)**阿耨多羅**(無常・最高という意味)**三藐**(正しいという意味)**三菩提**(すべての智慧の集まり)(とく あのくたら さんみやく さんぼだい)---仏の悟りは最高に優れており非常に普遍性を持っている悟りである。絶対の自覚(功德)を説いています。

ここまでが**起承転結の転**

ここでは人には**仏性**があるので時間・空間を乗り越えてすべての人が波羅蜜を行ずれば正しい悟りを得ることができる。仏になれると約束しているもつとも力強い章です。

教えはここで終わることになります。

無常の仏のころ・仏の命は万人の胸に宿っていることを悟ったというだけで万事 OK ではない。そこにとどまってはいけないと言われているようです。

つまり素材の原石を磨き上げて輝く宝石に磨き上げたら、それで目的を達したということではないのです。完成したらそれを否定し(「空」とする)永遠に磨き続けよということです。

日光東照宮の陽明門は飛騨工の作といわれていますが門柱のひとつが「魔除けの逆柱」といわれ、わざと彫刻図柄が他の柱と天地逆にしてありますが、完成された美を「空」とし、逆柱を一本設けることによりそこから抜け出した結果であるといえます。修行者にここが頂上だというリミットはないのです。このように「悟り」にはリミットがないのです。

起承転結の結は---エンディングテーマ・最終楽章・呪文みたいなものが以下です。

故知(ゆえに人は知るべきだ)**般若波羅蜜多**(こち はんにゃはらみつた)

---六波羅蜜を行ずる(修行すること)により人は以下のことを知るべきだ。

是大神呪(ぜだいじんしゆ)--- 声聞(せいもん)の位の人が唱えるものもしかり。下参照

「呪」とは真の言葉、仏、如来の真の言葉という意味。陀羅尼(だらに)ともいう。

平安朝とかの昔は「呪」には病気・けが・心の闇を治す力があると信じられていた。

これは密教の信仰=真言宗(高野山)です。空海(774-835 平安初期京都の東寺)が中国から伝えました。天台宗(比叡山-最澄 767-822 平安時代)は密教と顯教(秘密にせず明らかに説かれた教えのこと)の二本立てです。

浄土真宗(親鸞上人 1173-1262 鎌倉時代)は在家仏教(出家して僧になることなく、俗人の立場で信仰する仏教。俗人の信仰の意義を評価する仏教。)です。

「般若心経」はどのお寺に行っても通じます。

「法華経」には「三開顕一(さんかいけんいつ)」--三を開いて一を顕す。

人間の位を次の三つに分けています。一は唯一無二の仏様

1.声聞(せいもん)---人から聞いて理解する立場。受け身の立場。

ここで唱えるのが「大神呪」

2.縁覚(えんかく)---本を読んだりインターネットを見て理解する立場。受け身

ここで唱えるのが「大明呪」

3.菩薩の立場---情報を発信する側はここの立場となるのか??

ここで唱えるのが「無上呪」

「如来」が唱える最高のものを「無等等呪」といいます。

「無等」とは「無常」をさらに讃嘆した言葉です。「無比」「正等」と言い換えてもいいようです。空気のような存在を意味するようです。どこにでもあるので比較しようがないということです。しかし普遍にあるという点では平等、すなわち「無等 等」ということです。「等しくなくして等しい」と否定して肯定しています。真理は不変であり他と比べようがないから「無等」だ。しかしこの真理は等しく保持しているから、個々の存在は皆平等であり等しいというのです。

全ての存在に「仏性(ぶっしょう:仏となる可能性)」を認め「仏性」を持たない人は一人もいないのだから、比べる対象がないという点で「無等」であり、しかし例外なく誰もが「仏性」を有するという点ではともに等しいのです。

是大明呪(ぜだいみょうしゆ)--- 縁覚(えんかく)の位の人が唱えるものもしかり。上参照

は無上呪(ぜむじょうしゆ)--- 菩薩の位の人が唱えるものもしかり。上参照

般若の思想では「無上」を否定の肯定として用います。自己に潜む無常の尊さをは無常の呪として称えます。

は無等等呪(ぜむとうどうしゆ)--- 如来が唱える最高のものもしかり

三段階で畳み掛けているのが力強い。

私たちは般若の智慧(仏性)を内蔵するから、外なる般若の智慧が実感できるのです。

仏を信ずるとは、仏に信じられていることです。人は大いなる永遠の命という流れの中の一つの竹籠のようなものであり、どんなに小さな粗末な竹籠であっても永遠の命は惜しみなく流れ込んでくるのです。それを信ずるのが信心、体得できた時を悟ったといえます。

似たような表現としてゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe1749-1832 独)の言葉に

「私の中に神がなかったら、どうして天上の神を見ることができようか」があります。

このようなことをただの概念としてではなく実感として体で受け取るには実践が必要といわれています。

新約聖書(ヨハネ伝 1.1)に

「はじめにことばあり ことばは神とともにあり ことばは神なりき」

意味-----はじめから理性的法則・生命力は神とともにあり 理性的法則・生命力は神そのものである。→神は理性的法則・生命力の根源として存在している。

はじめにとは-----はじめから すでにの意味

ことばとは-----ロゴスのこと。世界の根底に横たわっている理性的法則・生命力

釈尊(BC500 頃)のことば

「私が悟った法(だるま)は、私以前にも存在していた。ただその存在を悟ったのが私である。そして、誰もが私と同じにこの法を悟る可能性(仏性)を、当人が気付かないだけで必ず保有している事実もあわせ悟った」といわれています。

法(だるま)とは-----あらゆる現象の根底にある規範・法則であり、悟った人を意味する「ブツダ・仏」とは、その「法」を見た人のことをいい、仏教というのもその「法」を目指すものです。したがってブツダといっても「神の子」や「預言者」というものとは根本的に違うといえます。仏教の特徴として、知ることのできない事柄について独断的な解釈をしたり、それを人々に信じるよう強制したりすることはありません。

ちなみに日本では、「仏教」という言葉は明治以前には普通に使われる言葉ではありません

でした。かつて仏教は仏道、仏法などと呼ばれ、神道などの一見異なるようにみえる信仰とも矛盾する概念ではなかったのです。

聖書の「ことば」と仏教の「法」はかなり似ている感じを受けます。

「はじめにことばあり」は物理学においても真理です。

釈尊が悟った因果の法則も科学的に真理です。

能除一切苦(のうじょいっさいく)--この呪文を唱えることが一切の苦しみを除くという意味。生まれながらの善人も悪人もいない。何かは因となり縁となって移り変わってゆく「空なる存在」であることに気づけば能(よ)く一切の苦を除く真実にして虚(こ)ならずの意味が分かってくると思います。

真実不虚(しんじつふこ)---これは真実にして全く嘘ではありません という意味。

「大神呪」、「大明呪」、「無上呪」、「無等等呪」のいずれも苦しみから解放される。

聖徳太子(574-622 飛鳥時代)のお言葉(遺言)にもこのような心境がうかがえます。

「世間虚仮(せけんこけ) 唯仏是真(ゆいぶつぜしん)」

意味---人間が住むこの世の中は、無常と無我の移ろいの現象に過ぎない。この現象を貫く
因縁の道理だけが真実である。

ちなみに聖徳太子は中国からの仏教の導入に熱心だった人です。

以上のように般若心経はあらゆるものを「空」としてきました。それは何かに執着することが足元をすくわれる迷いのもとであるから、五官の対象になる物は全て空ろなものである。ただ、因と縁によってそのように見えるだけのものであるという般若の智慧を学ぶためだったわけです。

何度か現れる「是」とは次に現れる呪文をさします。

故説般若波羅蜜多呪(こせつはんにはらみつたしゆ)--- ゆえに、ほとけ様(智慧)の真言を説きます。

即説呪曰(そくせつしゆわつ)--- すなわち真言を説けば

以下が呪文です。サンスクリット語の発音を漢字で表わしたものです。

掲諦掲諦(ぎやていぎやてい)

波羅掲諦(はらぎやてい)

波羅僧掲諦(はらそうぎやてい)

菩提薩婆訶(ぼじそわか)---ここはキリスト教の「アーメン」に相当する。

この四行は「真言」といいこれを唱えさえすれば垢役を払ってくれると信じられていた。

呪文なのであえて訳さないようです。サンスクリット語からの「音写」です。

あえて訳せば「往け往け 彼の岸へ いざともに渡らん さいわいなるかな」

宇宙の生命(何か超越的な力に対して神、仏?)に呼びかける呪文のようなもの?

南無(帰依しますという意味)**阿弥陀仏**—阿弥陀仏(宇宙の生命)に帰依します。---親鸞の教え(呪文)---浄土真宗の教え---南無阿弥陀仏と唱えていけば救われるという。

密教(弘法大師=空海)ではもっと知りたかったら自分で修行して感得しなさい。人が説き聞かせてわかるものでないという立場です。

顕教(密教以外の仏教のこと)である般若心経が最後のところに来て密教的表現で終わるのが不思議ですが、普通の人々が野に生えている雑草も医者が見れば薬草の存在がわかるように**顕教**である般若心経に密教の文言が盛られていてもその教えを読み取れる人もいれば、読み取れない人もいても それでいいとするようです。ダイヤの原石とみるか、ただの石ころだとみるかはあなた次第ということか。悟り・修行の程度でとらえ方が違うと言いたいのでしょうか。

感想・考察

唱えることによってあらゆる思いから離れることができ「空」にちかづき固定観念から解放してくれ「無」になれるという考えです。

「空」や「無」について東大寺の**清水公照師**(1911-1999)が外人に対して説明される時「腹がへったら、なんでもうまい、ということだ」と、言われたそうです。わかりやすいお言葉だということです。高度な機械文明、高度な経済生活に慣れ親しんでいると、いわゆる満腹の状態なので、なんでもうまいという感覚が生まれず、世の中の当たり前現象に感動するという感覚が鈍感になっているのではないのでしょうか。

以前、鎌倉建長寺のお坊さんの講和を会社で聞いた時の話ですが、一週間壁に向かって座禅を続けたのち、ふと庭の緑に眼が行ったとき、今まで体験したことのないような燃えるような緑の美しさに感動したという話を聞いたことがありますが、清水公照師のお話に通じるものがあるようです。

文明の進化による恩恵は多々あることは勿論ですが、アイルランド・ケリー州のアイベラ半島; 2014年誕生したばかりの星空保護区に夜間の照明を極力抑えて、星空の美しさが売り物で天文台を誘致出来るまでになった村があるようです(NHKの「地球イチバン」で放送された)が、暗闇を増やすことにより生態系も変化をしてくれて、「暗闇は命のゆりかご」であることや、「大きな宇宙と小さな自分」が実感できたそうです。

<http://trip-earth.com/namibian-nights-007/>

リンク切れ

このように眼、耳、鼻、舌、触から伝わる物を文明から生じるノイズを取り去った環境に身を置いてみるのも、原点に返るという意味で、今まで見えなかったもの見えるようになり「心」を揺さぶる何かを発見できるかもしれません。

呪文の音の響き一つ一つに見えない力=神秘の力があると信じられてきました。

「私」が世界との妨げとなっている。「言葉」もそれにより概念が固定化され世界を歪めているとの解釈で「私」「言葉」のない状態すなわち天然自然の命といったようなものに近づく方法のひとつとして「呪文」がある。意味ではなく音が大事であるという。

音を聞く、発することに力を感じる？ 日本人は「オノマトペ」(仏:onomatopee;擬音語、擬態語を包括的に指した言葉)を多く使う民族です。そのため音そのもので意味が伝わりやすい。たとえば「しっくり」「じっくり」を聞いただけで意味の違いがわかってしまう民族なので掲諦掲諦(ぎやていぎやてい)波羅掲諦(はらぎやてい)波羅僧掲諦(はらそうぎやてい)菩提薩婆訶(ぼじそわか)という響きになじみ易いのではないかと主張する人もいます。

お経の「意味」に対するリスペクトとは別に唱えることの重要性を理解する必要があるようです。「言葉」で伝える領域を超えたところを呪文により捕まえようとするものです。

お経を唱えている時「意味」を考えてしまうと途端に間違えてしまうようです。唱えるということは「今」だけを考える行為のようです。これって脳科学的には「海馬」を刺激活性化しているのではないのでしょうか。さらに呪文をくりかえすことにより大脳に記憶され脳の活動を活発化させているようです。「海馬」を刺激活性化させれば細胞も増加できる部位なので老化防止にも効果があるはずです。

「写経」も呪文と同じような「空」「無」に近づく効果があるようです。

ここでは呪文の大切さを直接「いのち」に響く力としてとらえ訴えているようです。呪文を唱えることによって脳の海馬に訴え「私」の感じる痛みを忘れてたりできたのでしょうか。呪文の響きの中に、神経細胞などの分子に共鳴する何かがあるのかもしれない。

昔から「密教」では音以外に熱、光、香を効果的に組み合わせ、大脳にインプットされた固定的、合理的概念をとび越え、生まれた時に持っていた本能的「いのち」に直接働きかけるものがあるのかもしれない。

このような今の科学では解明できない分野を欧米でも真面目に取り組んでいる人は大勢います。例えばリン・マクタガート(Lynne McTaggart 1951-米)は著書「響きあう生命・意識・宇宙」のなかで”zero point field”なるものを提唱しています。真空の中に内在する未知のエネルギーとヒーリング効果について探究しているようでして、外部からの熱、電磁場、音などの波動が真空内の未知のエネルギーに共鳴しているのではないかと、現在は科学的裏付けが見いだせなく、研究を続けている無名の先生が多くおられるようです。

現代のミリオンセラーの音楽の響きも呪文と同じように、聞いた人が「いのち」に響く何かを感じ取りミリオンセラーになったのでしょうか？

脳の神経ネットワーク解析も徐々に進展していますので、呪文状態の脳の働きについてもいずれ次第に解明されてくるでしょう。

般若心経(はんにやしんぎょう)

仏様の功德をほめ讃えている。

以上で経文は終わりです。

般若心経は繰り返し一切は「空」であるとしつこいほど説き続けています。

「五蘊」もない、「因縁」もない、「四諦」もないというすべてが「空」なのと悟る般若の智慧も一切が「空」ならば「智」もなく「得」もない。

ならば、空っぽなのかというと、空っぽではないという。無い無いづくしではなんのこともやらさっぱりわからない。!!!

しかしすべては「**因縁・縁起**」によっておこり、それを認識する心がなければ、あっても無いのと同じだと「**般若心経**」は教えています。

宇宙には人間では推し量かれない何か超越的な力を持った生命力(神、仏)が存在すると信ずることが宗教である。この宇宙の生命に呼びかけるのが呪文であるようです。

「空」「無」に近づくことにより価値観、世界観を見直す機会とすることにつながるような気がします。

(我々は非常に小さな一滴のような短い時間しかない生命だけれども宇宙の大生命から送られてきている生命であり、心が無にすれば宇宙の大生命に通じることができると信じて---座禅につながるのか?)

お釈迦様は生命は一瞬一瞬動いている一瞬一瞬を一生懸命に生きることが我々の生き方であるといわれています。

昔の人は、この世の移ろいは何か大きな計り知れない力(宇宙の大生命)に動かされて生きている自分が頼りなく思えてきて、何かを信じたくなる気持ちになり宇宙の大生命に通じるためにやってきた人が**お釈迦様**(BC500頃)、**キリスト**(BC4-28頃)、**マホメット**(570-632頃)であるということか?

高度な文明、高度な生活に慣れ親しんでいると、いわゆる満腹の状態なので、なんでもうまいという感覚が生まれず、世の中の当たり前の見過ごしやすい現象に気づき感動するという感覚が鈍感になっているのではないのでしょうか。日々の努力・修行によりこのようなことにならないように努めようではないかといわれているようです。

仏教とは四角い人間を丸くするような気がします。

お釈迦様(釈尊)臨終の言葉：

「汝らは自らを燈明とし、自らをよりどころとせよ。他人をよりどころとせず、法をよりどころとせよ」

「この世は美しい、人間の生命はなんと甘美なものだろう」

意味:お前たちは自分を明かりとし、頼りにするのは自分であり、自分がしっかりしなきゃだめ、自分が自分の心を鍛え、自分が正しいことをする人間になり、そういう自分を頼りにしなさい。自分を鍛えていきなさい。人の言うことに惑わされるな。

釈尊の開いた仏教の我流結論

自分と仏法をよりどころとして、人間形成をしながら生きていく、そして理想の人格に自分を鍛え、高めていきなさいという教えか。その不断の努力の過程でふと、新しい発想やひらめきも生まれてくるのだと教えられたような気がします。

ヨルゲン・ランダース(Jørgen Randers 1945-ノルウェー)が著書「2052 今後 40 年のグローバル予測」の中で論じられているように、資源、環境、人口、経済格差等の問題を抱えながらブリックスが GDP を延ばし先進国並みの生活水準を目指していけば資源枯渇による価格高騰の傾向は避けられず、先進国はそれに追随するだけの成長が得られなくなり、また限りある資源の平等な入手を平和的に政治が解決できるかなど人類が乗り越えなくてはならない課題は多々あります。あるいはジャレド・ダイヤモンド(Jared Mason Diamond, 1937 -米国)が著書「文明崩壊」で述べているように過去の歴史の教訓として文明崩壊は栄華の終わりに急激に訪れるという事実を踏まえ、それを乗り越えるには何をすべきか？

目指すべき方向として政治(民主主義)、幸福、成長(資本主義)等に対する価値判断の転換をこれからは求められることになりそうです。その時の判断基準の基礎として人間は何のために生きて死んでゆくのか、幸福とは不幸とは何か・という基本テーマについて般若心経をはじめとする過去の先人の知的資産も価値判断の参考として諸問題を解決してゆかざるをえないのではと考えさせられました。

「大般若経 600 巻」の漢訳版は当時写経が盛んで日本にも高野山ほかに国の重要文化財の指定をうけ保存されています。玄奘三蔵が持ち帰った原文の 600 巻は行方知らずです。当時破棄されたか、文化大革命時代に破棄されたか、はたまたチベット自治区のどこかにひっそりと保存されているのか不明です。もし玄奘三蔵が背負ったであろうその経典が発見されれば一大ニュースとなるでしょう。

以上

語意の説明・解説

a. 「無常偈」(むじょうげ)とは…次の 4 行からなる詩です。生きていく上の心の持ち方を

教えたものです。釈尊の教えの根本であるといわれています。

1. 「諸行無常」 ---すべてのものは移ろう、永遠はない ということ。
2. 「是生滅法(ぜしょうめっぽう)」 ---生じたものは必ず滅す。煩惱の炎を消せば、
3. 「生滅滅已(しょうめつめつち)」 ---生じ滅するといった移り変わりがやみ、
4. 「寂滅為楽(しょうめついらく)」 ---涅槃静寂の境地に入る。

b. 「無常感」とは---一切は無常であるとする、ものの見方。以下にいくつかの例があります。

1. 道元(1200-1253 鎌倉時代初期)の歌

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて涼しかりけり

これは川端康成(1921 - 1972 年)がノーベル賞受賞講演時紹介されたことでも有名

2. 「いろは歌」

色は匂えとちりぬるを わか世たれそ常ならむ うみの奥山けふこえて あさき夢みし
酔ひもせず

意味「花は咲いても散ってしまう。そんな世の中にずっと同じ姿で存在し続けるものなんてありえない。「人生」という険しい山道を今日もまた1つ越えてはかない夢は見たくないものだ、酔いもせずに。」

3. 「方丈記」 鴨長明 (鎌倉時代 1185-1333)

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、
かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。

4. 「閑吟集」 昔の小唄、流行歌を収めたもの。永正 15 年 (1518 年) に成立。

当時の日本人の心をよく現わしているといわれる。

無常観、室町びとが感情を託して歌った 311 首が収められている。

代表例 「憂き世」 = 「浮世」

- 「世の中は ちろりにすぐる ちろりちろり」

意味: 世の中はまばたきしている間にすると過ぎてゆく

- 「なにともなやの 浮世は風波の一葉よ」

意味: なんてことはない、浮世は風に吹かれる木の葉のようなものだ。つまり浮世だ

- 「なにともなやの なにともなやの 人生七十古来稀なり」

意味: おやまあ、ほんとに私はいつの間にか七十にもなり、古稀を祝わってくれるそ
うだが、まあそんなことはどうだっていいや

- 「ただ なにごともかごとも 夢まぼろしや水の泡 笹の葉におく露の間に あ
じきな世や」

意味: この世はすべて夢まぼろし、笹の葉に露をおく、そのような短い間に過ぎて
ゆく、非常にはかないものだ

- 「夢まぼろしや 南無三宝(=Oh my God!)」

意味: この世は夢まぼろしか そりゃえらいこっちゃ

●「くすむひとは見られぬ 夢の夢の夢の世を うつつ顔して」

意味: まじめくさった人なんて見られたものじゃない。夢の夢の夢のようにはかない
この世の中を、さも一人悟ったような顔つきをしてさ

●「なにしょうぞ くすんで 一期は夢よ ただ狂え」

意味: どうせ真面目くさって生きたところで、しょせん人生は夢の夢じゃないか
それならば遊び狂え

日本人にはわりと呑気に構えて難関を乗り越り生きてきたところがある。

祇園精舎(平家物語:作者不詳 1221-35年頃)

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅(しやら) 雙樹の花の色、盛者(じょうしや) 必衰の理(ことわり)を顯(あらわ)す。驕(おご)れる者久しからず、只春の夜(よ)の夢の如し。猛(たけ)き者も遂には滅びぬ、偏(ひとえ)に風の前の塵に同じ。……

祇園精舎 (ぎおんしょうじゃ正式名: **祇樹給孤独園精舎**、ぎじゅぎつこどくおんしょうじゃ) は、中インドのコーサラ国首都シュラーヴァステイー(舎衛城)にあった寺院である。釈迦が説法を行った場所であり、天竺五精舎(釈迦在世にあった5つの寺院)の1つである。

沙羅雙樹

・インド北部原産。インドの高地などに生える。幹高は30mにも達する。春に白い花を咲かせ、ジャスミンにも似た香りを放つ。

・ミャンマーの国花。「娑羅双樹」とも書く。・別名「沙羅の木(さらのき、しやらのき)」
・釈迦が亡くなったとき(入滅のとき)、この木が四方を囲んで植えられていたが、入滅の際にこの木が枯れて鶴の羽根のように白くなったとの伝説から、仏教では聖木とされている。しかし、日本では「夏椿(なつつばき)」のことを沙羅双樹として扱うことが多い。

・**仏教の三大聖樹**の一つ。

「仏教の三大聖樹」1.釈迦誕生 無憂樹(ムユウジュ) 2.釈迦悟り 印度菩提樹(インドボダイジュ) 3.釈迦入滅 沙羅双樹(サラソウジュ)

c. 「一切衆生悉有仏性(いっさい しゅじょう しつう ぶつしょう)」とは

人間を含めあらゆるものに仏性が宿ると考えるためである。

人間はじめ動物も樹木も悟りの境地に達すれば仏になると考える**仏教の基本思想**。

----多神教の考え

d. 「法華経」(AC40頃成立)とは

大乘仏教経典の一つ。天台宗、日蓮宗の中心聖典。正しくは『妙法蓮華経』です。

お釈迦さまの本当の心があらわされており、すべてのお経が含まれています。まさに、こ

の世をイキイキと生きるための仏教のエッセンスが詰まった"教えの集大成"とも呼べるものです。

玄奘三蔵の時代より 250 年ほど前に鳩摩羅什(くまらじゅう 344-413 中国)という人が「維摩經」「法華經」「般若經」「阿弥陀經」などを漢訳している。

e.華嚴の教え(東大寺)とは

- ① 世界に存在するあらゆるものは、それぞれの密接な相関関係の上に成り立ち、互いに融合し調和を保ち、平和で秩序ある世界を形成している。
- ② ひとつは全ての中に、全てを一つの中に観ることが出来る。
- ③ あらゆる事象は心が転じたものと観察し、形や時間にとらわれる事なく宇宙の真理を探究する努力を怠らない。
- ④ 動植物も含めたすべての生きとし生けるものの繁栄を願い、人々の苦しみを救済しようとする菩薩の行ないを實踐し、互いのおもいやりの心をつなげてゆく。

f.十二縁起とは---因縁:原因があつて結果があること。12 ある。輪廻につながる。

- 1.無明(むみょう)---無知、迷いの根本
- 2.行---身、口、意による潜在的形成力、生活作用、生活活動
- 3.識---識別作用、判断力
4. 名色(みょうしき)---精神(名のこと)と肉体(色のこと)、心と物
5. 六入(ろくにゅう)---六根、六処おなじ、眼、耳、鼻、舌、身、意の六の感覚器官
- 6.触(そく) ---六根とその対象の六境(色声香味触法のこと)が触れること
- 7.受 ---感受作用
- 8.愛---渴愛
9. 取---執着
10. 有---現実の人生の姿
11. 生(しょう)---生まれること
- 12.老・死---苦を代表させたもの

g.六波羅蜜(6行—菩薩の行ともいう)とは-----大乘仏教的項目

六波羅蜜を行ずることによって心に妨げるものがなくなり自由自在になり、恐れもなくなる。---これを菩薩の境地と言っています。

- 1.布施---施すこと。物施、法施、無畏施がある。
- 2.持戒---戒律を守ること。
- 3.忍辱---辛抱すること。人は愛し合わねばならぬことの道理はよく知りながら、ともすれば憎しみ合います。この乱れたリズムの底に乱れることのない「こころ」があると信じること。

4. **精進**---努め励むこと。
5. **禪定**---座禅すること。
6. **智慧**---真実の姿を見極める力。もう一人の自分に目覚めること(成仏ともいわれる)。

h. 四諦(したい)とは—四つの真理。「諦」とは真理の意味です。釈尊の教えの根本。

1. **苦諦(くたい)**---世の苦(四苦八苦)の現実を直視する。苦は生まれることから始まる。

この世は「苦」であるとの真理。

2. **集諦(じったい)**---苦の原因を渴愛としそれは人間の心の無明によるものとみる。

「苦」の原因は無常と人間のえり好み身勝手な執着にあるとの真理。

3. **滅諦(めったい)**---苦の原因である無明を滅して、迷わない理想の境地、涅槃にはいること。

無常と執着を超えることが苦を滅した「悟り」の世界であるとの真理。

4. **道諦(どうたい)**---苦からの脱出方法でそれは**八正道**であるという ---- つまり悪いことはするな。

滅諦に達するには**八正道**を修行するという真理。

i. 八正道とは

1. **正見(しょうけん)**---正しい見解を身に着けること。四諦を理解すること。
2. **正思(せいし)**---正しい考え。四諦に基づく正しい判断を持つ。
3. **生語 妄語 悪口 両舌(二枚舌) 綺語(無駄口)**---しょうご/もうご/あっこう/りょうぜつ/きご)---これらを口にせず正しい言葉を使う。
4. **生業 殺生 偷盗 邪淫(しょうぎょう/せつしょう/ちゅうとう/じゃいん)**
---これらの悪行を犯さず正しい善行・行為を積むこと。
5. **生命(しょうみょう)**---規則正しい生活をし、身、口、意の三業を正しく保つ。
6. **生精進(しょうしょうじん)**---正しい努力をして涅槃の境地を目指すこと。
7. **生念(しょうねん)** ---生精進を進め、心を正しく持つこと。正しい思念。
8. **生定(しょうじょう)**---禪定により心を静め、精神の安定を保つ。正しい瞑想。

j. 「自利利他」とは

比叡山を開いた**最澄(さいちょう)伝教大師(767-822 平安時代)**の言葉といわれています。

利他を実践すれば、いつかは巡り巡って自分の利益になるというような考え方ではなく、「利他の実践がそのまま自分の幸せなのだ」という考え方です。

自らの悟りのために修行し努力することと、他の人の救済のために尽くすこと。この二つを共に完全に行うことを大乘の理想とする。 **自利利他**を志す人はすべて菩薩ともいいます。

k. 「色即是空」「空即是色」の「ダライラマ」の解釈

ダライラマ 14 世(1935-中)は「色即是空」の「色(物質)」は他のものに依存して与えられた

ものであり、それ自体の側からの成立がない「空」の本質をもっている。つまり、「色(物質)」の有り様がそれ自体の側からの成立がない「空」の本質があるため「色(物質)」は「空」であるという。

「空即是色」は、「色(物質)」の「空」、つまり物質的な存在の本質としての「空」を意味している。また、様々な条件が集まることによって、物質的な存在が成立し、条件の集まりに依存しなければ、物質的な存在は成立できない、それゆえ条件の集まりに依存しているが故に物質的な存在である。このように条件の集まりに依存しているということが「空」の意味である。

つまり「色即是空」「空即是色」とは土台となる現象である物質的な存在とその究極のありようである空の二つは**同じ現象の異なった側面である**ことを意味しているという。

1. 大乘仏教と小乗仏教

大乘仏教-----大乘とは「大きな乗り物」という意味です。

釈迦没後 500 年ぐらいしてからインドでそれまで形骸化してきた仏教をもっと現実に即した活力ある仏教にしようという考えが起こりお釈迦様の教えを立て直した。それが大乘仏教で仏教の精神として自分だけが悟りを開くのでなく、自分のことを忘れて他人の悩みを解決する「忘己利他」の立場である。

インド→チベット→中国→朝鮮→日本へと渡ってきた。現在の日本の仏教は**大乘仏教(北方仏教ともいう)**です。

天台宗の教えは**大乘仏教の精神をわし掴みにする**ものともいわれています。

小乗仏教

お釈迦様が悟りを開いたその直接の教えをその通りに書いたものを一生懸命修行をして自分が悟りを開く。この精神はスリランカ→タイへと南方のほうに伝わり**南方仏教**とも呼ばれる。黄色の衣が特徴です。

m. 曼荼羅 (まんだら) とは

仏教 (特に密教) において聖域、仏の悟りの境地、世界観などを仏像、シンボル、文字、神々などを用いて視覚的・象徴的に表したもの。「**曼陀羅**」と表記することもあります。

日本の美意識: わび(侘)とさび(寂)

さびは、閑寂さのなかに、奥深いものや豊かなものがおのずと感じられる美しさ、つまり見た目の美しさについての言葉です。この世のものは、経年変化によって、さびれたり、汚れたり、欠けたりします。一般的には劣化とみなされますが、逆に、その変化が織りなす、多様で独特な美しさを**さび**といいます。

一方、**わび**は、さびれや汚れを受け入れ、楽しもうとするポジティブな心についての言葉

です。貧粗・不足のなかに心の充足をみいだそうとする意識とも言われます。つまり、**さびの美しさを見出す心がわび**です。

さびが表面的な美しさだとすれば、**わび**は内面的な豊かさ。両者は表裏一体の価値観だからこそ、わび・さびと、よくセットで語られるのだそうです。

アインシュタインの宗教観

「体験することができるものの背後に、我々の精神が捉えることができないものがあり、その美しさや荘厳さは、かすかな反響として間接的にしか我々に到達しえないことの知覚、これが宗教性である。この意味で私は宗教的である」と言われています。「自然には宗教性がある」といい自然の既知なる部分の構造の美しさ、さらに未知なる部分への賛美を述べています。宗教のない科学は不完全であり、科学のない宗教は盲目であると述べあらゆるものの背後には、私たちが間接的にしか、垣間見られない秩序があるということです。それは信仰にも通じます。とも述べている。

理論物理学者である**スティーブン・ホーキング**博士(Stephen William Hawking 1942年 – 英国)も神と宇宙について語っている。

ホーキング博士は、ダーウィンが生物学で創造主の必要性を排除したように、**新しい物理学理論が宇宙のための創造主の役割を不必要なものにしたと主張した。**

ホーキング博士の著書『**グランド・デザイン (The Grand Design)**』の中で、創造論者の知的デザイン (Intellectual Design) を念頭に置いたタイトルの同書で、博士は、「宇宙には創造主が必要か」という問いを投げかけ、「ノー」と答えた。博士によると、ビッグバンは物理学的法則の避けられない結果であり、神の手や偶然によって説明できるものではない。

「重力の法則があるため、宇宙は無から自らを創造でき、これからもそうするだろう。このような自発的な創造が、無ではない有、すなわち、宇宙と人間が存在することになった理由だ」と強調した。

88年のベストセラー『**ホーキング、宇宙を語る**』という著書で、創造主の神が宇宙に対する科学的な説明と両立できないわけではない、というニュアンスを漂わせた。

ホーキング博士は当時、著書で、「人間が完璧な理論を発見できるなら、その理論は人間の理性の最後の勝利になるだろう。その時、人間は神の心を知ることになるだろう」と書いた。

しかし、博士は、米国の物理学者レナード・ムロディナウとの共著で、「宇宙は混沌 (chaos) から生まれるのではなく、神によって創造されたに違いない」というニュートンの信念を打ち砕く。

『**神は妄想である**』という本を書き、無神論を擁護した進化生物学者の**リチャード・ドー**

キンスは、同書の内容を単に自然の中に生きている人間だけでなく、まさにその自然のためのダーウィン主義で描写し、出版を歓迎した。ドーキンスは、「私は、物理学の詳しい内容をよく知らないが、私も（ホーキング博士と）全く同じことを仮定してきた」と話した。

数学者 **Edward Frenkel**(1968 年- 米国 UCB 大学)は次のように述べている。

「抽象世界を描くはずの純粋数学が、現実を記述する物理学と深いつながりを持つのはなぜか？」 「自然科学における数学の不合理なほどの有効性はどこからやってくるのか？」 「数学は単なる抽象的な存在ではないのではないか...？」と疑問を投げかけています。

1666 年—ニュートン微積分 24 歳 1905 年アインシュタイン相対性理論 26 歳

引用参考書

1. 瀬戸内寂聴(1922-): 「般若心経(生きるとは)」 中央公論新社
半分法話(雑談?)・平易 面白い バブル時代にベストセラーになった
2. 松原泰道(1907-2009): 「般若心経入門」 祥伝社黄金文庫
早大出身で高田好胤や石原慎太郎推薦のロングベストセラー
3. 玄侑宗久(1956-): 「現代語訳 般若心経」 筑摩書房 ちくま新書
慶大出身 臨済宗派福聚寺住職 2001 年「中陰の花」で芥川賞 硬いが理系向きか？
理路整然として格調あり。
4. NHK 放送 100 分 de 名著 「般若心経」1,2,3,4 回 司会:伊集院 光、島津 有理子
花園大学 佐々木 閑(1956-) 教授 京大工学部出身の仏教学者
2014 年 1 月と 9 月 2 回放送あり
5. 大阪経大論集 第 63 巻第 1 号 2012 年 5 月
黒木賢一(1951-) 「般若心経の心理学」
ドラマが語る「般若心経」が解説されています。
6. 講談社 ブルーパックス 「量子力学的世界像 101 の新知識」
素人向け量子力学最新情報 丁寧・適格わかりやすいので有名
米国の理論物理学者 ケネス・フォード(1926-)著 Harvard Univ. Press
- 7.a. IPMU News No.7 Sep. 2009 「重力のホログラフィー」
b. 理研講演会 2012/2/9 「科学者の矜持」
大栗博司 カリフォルニア工科大学&東京大学 カブリ IPMU
Super string theory の研究者が語る素粒子論の現状・課題・展望易しく解説

なおプロ級の名著として次があります。

岩波文庫 「般若心経・金剛般若経」中村 元(1912-1999)・他訳: インド哲学者、仏教学者、東京大学名誉教授、日本学士院会員。勲一等瑞宝章、文化勲章受章。
私は読解力が無いと思い読んでいませんので参考にはしていません。